

## 早稲田大学、東呉大学共催 国際シンポジウムの開催

テーマ：『東アジア地域の協力と平和』

日 時：2014年6月28日（土）13：00～18：30

場 所：東館6階 G-SEC Lab

使用言語：日本語、中国語同時通訳

### 【プログラム】

12：30 開場

13：00 - 13：20

来賓挨拶

沈 斯淳（台北駐日経済文化代表処代表）

潘 維大（東呉大学校長）

小口彦太（早稲田大学アジア研究機構長、元早稲田大学副総長）

清家 篤（慶應義塾長）

13：20 - 13：50

基調講演 趙 建民（行政院大陸委員会前首席副主任委員）

「東アジア地域における協力と平和 兩岸の事例」

13：50 - 15：20

セッション1：東アジアにおけるチャイナ・ファクター

司 会：黄 英哲（愛知大学）

若宮啓文（日本国際交流センター）

「安倍政権の中国観とナショナリズムの悪循環」

江藤名保子（慶應義塾大学東アジア研究所）

「中国の『愛国主義』と対日政策」

呉 介民（中央研究院社会学研究所）

「チャイナ・ファクターが台湾社会に与える影響」

宋 燕輝（中央研究院欧米研究所）

「東海平和への呼びかけの行く末」

討論者：高橋伸夫（慶應義塾大学）

15：20 - 15：40 コーヒーブレイク

15：40 - 17：10

セッション2：東アジアにおける信頼醸成

司 会：安田 淳（慶應義塾大学）

飯田将史（防衛研究所）

「東アジア海域での信頼醸成に向けて」

青山瑠妙（早稲田大学）

「中国の台頭とアジアの地域秩序」

羅 致政（東呉大学）

「東アジア国家の戦略的衝突と協調」

童 振源（国立政治大学）

「アジア経済の統合と兩岸経済関係」

討論者： 浅野亮（同志社大学）

17：10 - 18：20

ラウンドテーブル・ディスカッション：東アジア地域の協力と平和

司 会：小嶋華津子（慶應義塾大学）

陳 徳昇（国立政治大学）

天児 慧（早稲田大学）

謝 政諭（東呉大学）

松田康博（東京大学）

巖 震生（国立政治大学）

13：50 - 15：20

閉会挨拶

謝 政諭（東呉大学人文社会学院長）

高橋伸夫（慶應義塾大学東アジア研究所長）

## 【概要】

今回のシンポジウムは、台湾の東呉大学、早稲田大学の共催を得て、東アジア研究所の主催のもとで開催された。来賓挨拶で、各組織の代表者が共通して指摘したのは東アジアの不安定な情勢のなか、国境を越えた地域研究活動をさらに進める必要性である。馬英九政権で直接中国大陸との関係を担っていた趙建民氏による基調講演では、兩岸関係の最近の複雑な動きを解説され、台頭する中国にどのように直面しそして東アジアの平和と安定をどのように保つのかは、台日双方の課題で協力できる分野であると呼びかけた。

セッション1では中国政府が主体となった「愛国主義」の理論形成と歴史認識問題の連動、経済依存関係を通じた政治目標の実現が検討されたと同時に、歴史認識問題をめぐる日本の反応と見方や東シナ海紛争をめぐる台湾など周辺地域が取り得るイニシアティブについても検討された。チャイナ・ファクターを解明するだけでなく周辺地域が果たす役割と中国に対する影響も強調された。セッション2では、相互信頼の構築が進まない海洋、安全問題と進みやすい経済統合が実例として挙げられ、中国外交の硬直化と協調的な側面の存在も確認された。経済統合の前進は地域の安定を総じて促進できると結論付けた。最後のラウンドテーブルでは、新たな協力のしくみの創出、地域各国の市民社会の強化や国内問題の克服などが不可欠と多くの提言がなされた。安全保障ジレンマを越えるために、

中国は自身のスタンスをコントロールする必要があり、周辺国も心理的要素の克服や、お互いの協力と中国の国内問題に目を配れなければならない。さらに日本に関しては、歴史認識問題を乗り越えれば、地域における役割が増大すると指摘された。

このようなシンポジウムが東アジア研究所、その前身である地域研究センターを含め、設立30周年の節目に開催できたことは慶應義塾の地域研究における重要な社会的貢献の一環だといえよう。